HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペレストロイカ下のソ連における教育史の見直し（B・ビム＝バード論文の翻訳紹介を中心に）
Author(s)	所, 伸一
Citation	107-115 「ソビエトにおける教育改革と児童観の変遷」科学研究費・研究報告書
Issue Date	1989-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59636
Type	bookchapter
File Information	201508111153.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

所　　伸一

ペレストロイカ下のソ連における教育史の見直し

(Б・ビム＝バード論文の翻訳紹介を中心に)

《はじめに》――訳者

ここに訳出し紹介しようとするのは、ペレストロイカの時代に入ったソ連において活躍中の気鋭の教育学者によって書かれた、ソビエト期教育の歴史の見直しを呼び掛ける、みずみずしい論文である。

この論文は、分量としては短い新聞記事でありながら革命後70年間を論じているため、諸問題へのバランスのとれた論及や構成、あるいは何かの証明は望めないかも知れない。しかしそれは二義的なことである。重要なことは、十月革命で打ち出しながらその後接近できていない種々の教育原則や教育において形成された矛盾や制約を指摘して客観的であろうとしており、しかも教育学のペレストロイカをアピールしようとするスタイルを取っていることにある。

現代ソ連の新しい息吹に触れ、そして教育の構造矛盾の存在とそのペレストロイカ的把握をひとわたり知る上で必要であろうし、また、「現在の学校は子どもに…大きな借りがある」との基本モチーフをもつこの論文を咀嚼することは今回のわれわれの共同研究のテーマ――ソ連の児童観の変遷――にかかわる基礎作業であると考え、ここにビム＝バード論文を紹介する次第である。(訳者による比較的長い事項注とコメント、及び著者紹介は本文のあとに載せる。短い注は〔　〕に入れて本文中に挿入する)。

《道を振り返れ》――Б・ビム＝バード

わが国の社会生活の現在という時代は独特な時代である。ただ事が改まるのでそうだというのに止まらない。そのグローバルな意味の新しさは、われわれの社会、われわれの全道程――原点以来の――の本質そのものを集団的、大衆的に自覚する取組みがこの数十年来はじめて、党のイニシャチブで行われているということにある。経済学者たちの論争は、今日の状態の原点と原因の探求が歴史過程の奥深く入って行く今、そういう取組みのあざやかな例である。

そしてこの、今始まった、真実そのものを求める行進には、すべての社会制度が必ず含められなければならない。

今日われわれにとり、われわれの共通の原点に立返ることがきわめて重要である。革命の当初に立返ることである。1920年代に立返ることである。この時代をちょっと見るだけで、われわれは、その後わが国の普通学校にいったい何が起きたのかを理解できるだろうし、われわれが今清算する

のも止むをえないものは何か、急に現れたものは何か、また今後いかにしてそれを避けるか、大切に残し、さらに発展させなければならないものは何か、を理解できるであろう。

…1929年、アメリカで、当時70歳のジョン・デューイの著書『ソビエト・ロシアと革命世界の印象』が出版されている（わが国では残念ながらこの本は翻訳されていない）〔日本でも翻訳は出ていない〕。彼は何者か？社会主義者か？いや違う。本当は彼はブルジョア的な哲学者、心理学者、教育学者で、アメリカ合衆国、日本、その他多くの資本主義諸国の学校に、20世紀の教育学が知る限りもっとも大きな影響を与えた人だ。彼は1928年にわが国を訪れた。10余りの学校と教育人民委員部の第一実験ステーションに立寄った。H・クループスカヤやC・シャーツキイと対談した。彼の本は次の言葉で始まっている。「私の印象記が有頂天になっているものと見えようとも、それも以下の印象の深刻さをもっぱら強調するものである。すなわち、ロシアの人民に固有の、そして革命によって解き放たれた内在的な力強さからうけた印象、新しい条件下、賢明で忠実な人々 —— 幸運にも私だけが会うことの出来た —— が教育によって切り開かれた特典と可能性を享受する際に示す知力と高潔さからうけた印象である。」

それは以下のやむを得ない告白であった。すなわち、「私は、もちろん何を見られるか予期していなかった。それは私にとって晴天の霹靂だった。…およそどこにもこういうことはなかった」と。

思い起こして頂けるだろうか。すでに1918年にレーニンがアメリカの学校に学ぶことが必要だと考えていたことを。その10年後にはジョン・デューイが、アメリカの教育者にむかって、ソビエトの学校に学ぼうと呼び掛けたのである。

デューイは肝心なものをつかんでいた。彼を狂喜させたものは、普通の庶民の教育が大衆的に普及した（アメリカ合衆国ではすでに19世紀末に無料中等教育が実施されていた）ことそのものではなくて、ただ、人間一人一人の人格的成長が自己目的であって、経済的および政治的な社会改造というものはその成長のための不可欠の前提であるとする理想が〔彼の見たソ連で〕人類史全体から見て最も完全に具体的な像を得たことであった。

アメリカ教育のリーダーは、ソビエト学校の最も価値ある、ユニークな —— と自分の判断する —— 5つの特徴をとくに指摘した。それをちょっと思い起こしてみよう。

第一は、子どもたちが受けている体系的で百科全書的な教育、そしてまた、一貫した世界観を、つまり、伝統的な学校教育課程のもつ中途半端やモザイク的性格を自ずから克服できる世界構成の理解を、彼らに与える教育、である。しかも「集団主義的な」世界観を与えるそれである。

第二には、ポリテフニズムである。ジョン・デューイはこの概念の意味を読者に次のように説明しようとした。すなわち、「ロシアのやり方ではポリテフニズムは、幾つかの専門の産業の基礎になっている知識と実際技能を教える学校を意味して……いる。それは、教育を一般教養と同一視する、広い陶冶概念である」と。また彼は、「専門化はここでは、一般的な技術・文化教育の基礎にたって初めて可能となる」と、ポリテフニズム概念から出てくるきわめて重要な要素を強調することもし

ている。

第三には、「学校の日常活動のお決まりの退屈と生気なさから救う、学習と生活の結合」がある。

第四は、社会活動への、また社会の社会主義的改造への、生徒と教師の参加である。

最後に、1920年代に作り出されたソビエト学校の中に、アメリカ教育学の長老は、「わが国の子どもたちよりもはるかに民主的に組織された子どもたちを見た。学校自治の制度のお陰で彼らは、自ら民主的だと見なしているわが国で行われているよりも、もっと彼らに相応しい、そしてもっと徹底した、訓育と知育を受けているのである。」

…国は飢えていた。その学校は寒く、何もかも不足で、赤貧に近かった。だから、アメリカの教育家を狂喜させるほどの水準には必ずしもなかったのである。

だがそれにも関わらず、知恵のある、探求心のある学校であった。集団主義の学校、創造性の学校、人格の自己発達の学校であった。そこには社会主義がたくさんあったし、もっともっと……になって行くことが約束されていた。しかし、1930年代の始めから学校に変化が起き、その結果、続く20年間に学校は自分の相貌を変えてしまった。

私は何を言おうとしているのか？学校の学習・教育のレーニン的原則の概念が過度に単純化されてしまった、ということである。われわれは、社会主義的学校とは、統一的、労働的、総合技術的、普通教育的学校であることを知っている。これらの環が一つでも脱落することは、学校における社会主義が少なくなって行くことを意味した。それゆえたちまち、学校の民主的・庶民的性格に背くことが行われ、生徒の一部の文化への接近は制限され、学校で育まれる人格の像は歪められていったのである。

統一学校という概念からまず論じてみよう。この概念は、より高い階梯の文化への接近において、誰に対してもまたいかなる理由においても、特権を認めない。何によってか？それは、統一学校とはすなわち、財産や社会的地位の不平等、文化的、民族的不平等、性、居住地（大都市、中央から隔たった村）、健康、家庭環境、就学前教育の性格、等などによる不平等の結果生じる不平等な子ども教育を、うめ合わせ、補正する学校である、ということによってである。

つまり、様々な子どもに対して文化的高みを手にする高いチャンスを等しく与えること、すなわち、統一的であるためには学校は画一であってはならず、才能にごく恵まれた者に対しても、ごく不幸な境遇の者に対しても、発達のための広範かつ柔軟な機会を与えなければならない、ということである。

統一学校は、一様な学校ではなく、教え子を統一的という以外の何かにおいては平等化しない学校、つまり各自が自分にとってより高い文化的発展水準を獲得できる学校、である。そしてそのためには、教材や、参考書、学校活動の形態と方法のかなりの多様性を不可欠とする。

学校の統一は、レーニンも一度ならず指摘したように、知識量の全国家的なミニマムをもちろん想定している。しかし決して鋳型は想定しない。

統一学校、それは目的の一致によって統一された、多様な諸学校の統一である。まさにそれゆえに1920年代には全国家的な教授プランと教育要綱は勧告的なものに過ぎなかったし、各学校ごとの創造的な受容を想定したものだった。だが３０年代にはいると、入学前の様々な教育を経てきた子どもを考慮した色々な参考書という多様性はなくなり、絶えずそして効果的に改善されてゆく「動的な」教科書もなくなり、柔軟で敏感な、そして適切な（今われわれが述べたような）相互応答が得られる「新聞＝教科書」や「日誌＝教科書」もなくなり、その代わりに、いわゆる固定教科書、つまり毎年改訂されることはなしに発行される教科書――誰にも選り好みは許されない単一の教科書――が導入されたのであった。〔後掲の訳者注①〕

あらゆるところの「平等化」〔＝ウラヴニローフカ〕の同じようなやり方によって、様々なカテゴリーの生徒が不平等な条件に置かれた。社会的不平等は、各校の最終学年と中等専門学校、高等教育機関における授業料（しかもそれはコルホーズ農民と労働者の家計にしてみれば高いものと感じられた）制度（1956年に廃止）の実施、入学試験・進級試験・卒業試験（第20回党大会〔1956年２～３月〕の後も試験はつい最近まで最終学年だけには残された）の実施……、によって隠れた形で維持された。

その結果、不完全学校（現在の８年制学校。かつてなら小学校〔４年〕や７年制学校など）の卒業の際に、労働者・農民の家族の出身者の一部はしばしば振い落とされた。こうして普通学校の上級学年〔第９、10学年。かつてなら第８学年以上〕は概して、「ホワイト・カラー」を再生産するところとなった。

1920年に「きわめて困難な状態」のため――レーニンはこう見ていた――、ただ一時的な措置として（「当面のあいだ」とレーニンは強調した）、余儀なくされた譲歩として普通学校の一部と職業技術学校の一部を融合する必要が起きたということが、現在では、教育政策の戦略となってしまった。私は、今日これは再検討されるべきであると確信している。

教育の継続のために――中等専門教育や高等教育のためでもあるが――必要なことをすべて教える後期中等教育を、誰も皆が、そして各人ごとに、完了しなければならない。そしてこれは今日、指導的な革新派教育者やわが国の教員の良心が痛切に感じていることである。たとえば、Ｂ・シャターロフ〔ウクライナのドネーツクの中学の数学・理科の教師。授業のポイント要約の方法で新機軸を出し、現在もっとも著名な革新教育家の一人〕は、将来の職業準備教育の利益を損わないようにしながら、同じ一つの教育機関の中ですべての者に後期中等教育を与える必要と可能性（教育の集約化と年限の短縮による）を主張している。

思い起こしてほしいのは、労働が1950年代末の改革の以前は学校から排除されていたことである。それ以降は現在に至るまで、労働は、座学に対する不自然な、そしてまたしても形式的な、付加物として存在している。1920年代の学校は教育と労働の結合の問題を立派に解決していた。学校に関する今日のすべての文書で呼掛けられているところでは、まず何よりも、教育と生産的・社会的労

働を結合することが不十分である。これらを統一することが必要なのである。

ポリテフニズムは、知識と労働、事実と言葉、これらの合金が中で溶け合っている本物のるつぼであった。まさにそこに、1920年代の学校にとり、「労働の知識と技能」それ自体のためでなく、ましてや職業指導のせまい課題のためでもなく、生産に入って行くことが実際に重要だった、その理由がある。

われわれがもうそろそろ評価しなければならないのは、グース〔教育人民委員部の教授法指導センター。1919～32年〕のコンプレックス的教育要綱や、プロジェクト教授法や、労働の科学の創始者でポリテフニズム教育のごく正確な教授方法 —— これが現在学校で失われている —— を与えたA・ガーステフの研究成果やの中に根をはっていたところの、全面性をめざし、また個人と社会の調和、人間労働と自然の調和をめざした、あの巨大なほとばしりである。

われわれはこの乱された調和の反響を評価し、測り始めたばかりであるが、この調和がそれ以降の学校卒業生の世代の意識の中で欠けているために、今われわれは、現在の経済担当者や学者、行政担当者にむかって、世界や、川、森、湖、海の運命や、われわれの国民的財産全体や……の運命に対する一貫した見地をすぐに持つようにと呼掛けても徒労に終わり、危険な自然破壊というしっぺ返しを受けているのである。

だがそれにもかかわらず、一貫して調和をもとめる教育学の出発点の「ルネッサンス」はふつふつと起こり、B・スホムリーンスキーに始まる最良の教育実践家たちの探求活動の中で、ますますねばり強く進路を切り開いている。

他の国についていえば、たとえば、ハンガリーのL・ガスパール博士の学校は、多くの点で1920年代のわが国の学校のこの路線を吸収したものであった〔後掲の訳者注②〕。Б・センドーフのブルガリアの実験も同様である。彼らの有利な点は、彼らがその時代に、われわれのかつての到達点に依拠する可能性だけでなく、それらの弱点や欠陥を考慮し克服する可能性も持っていたことにあるが、こういうことを、われわれ自身は奪われていたのである。

現在、わが国の文学や論壇では、弾圧 —— なかんづくサイバネティックスと遺伝学に対する —— の結果わが国の科学が経験した、そしてかろうじて堪えている悲劇を認識する深刻な過程が進んでいるが、今や、教育学と心理学における悲劇もその例に加えるべき時である。子どもに関するソビエト的な科学でありながら実在した誤りと歪曲とに基づいて1936年に〔7月4日付のいわゆる児童学批判の党中央委員会決定で〕「えせ科学」だと宣告された児童学の創始者たち、Л・ヴィゴーツキーとП・ブローンスキーの名前は、H・ヴァヴィーロフやH・ドゥビーニン〔共に遺伝学者。ルイセーンコ派に反対する学説を主張したため弾圧され、前者は1943年に獄死した。共にスターリンの死後名誉回復した〕のような名前と同列に置くべきである。その20年後にはサイバネティックスも児童学と同じになった。現在では恐らく、児童学そのものに立ちかえる必要はないだろう。しかし児童学の豊かな理念は発展させられるのを待っていると率直に言っておこう。

現在の学校は、子どもに対し、国民に対し、大きな借りがある。この借りを完全に返すこととは、まず第一に、壊滅させられた及び忘れ去られたより良いものすべてを「復権させ」、きっぱり承認することである。そしてこれに基づいて学校におけるレーニン的社会主義原則を蘇らせ、発展させることである。今わが国には、真に科学的な教育学知識の蘇生と発展のための、また、教育的課題を誠実に提起するための可能性が生まれた。だがそうは言ってもわれわれはまだ、はじめに公然とありたけの声で諸問題を指摘する機会、わが国の教育の中に歴史的に蓄積された諸矛盾の困難全体を照らし出す機会を持たないままで、諸問題を解決しようと呼掛けたというに過ぎない。

さあ、始めましょう！

〔以上、論文の全文。原タイトルは《Оглянись в пути》。テキストは1987年9月22日付『ウチーチェリスカヤ・ガゼータ（教員新聞）』の巻頭に掲載されたもの。テキストの太文字強調部分を訳文では傍線を付して区別した。〕

《注》——訳者

① 著者はここで、1933年2月12日付の党中央委員会決定「小学校と中学校の教科書について」がそれまで各共和国の管轄下で普及していたいわゆる「ワークブック」や「ばら売り教科書」などを発行停止させ、連邦中央認可の科目ごとの「単一の義務的教科書」を事実上制定し、以後現在までを規定したことを、批判しているのである。

②「ガスパールの学校」は、ラースロー・ガスパール（1937—）の唱える理念による学校。つまり、「生徒が獲得する知識は様々に体系立っていて良い」「学校では、学問が歩んだ複雑な全行程をなぞることとか、個別に物理学を、個別に化学を、また生物学を学ぶことは必ずしも必要でない。それはありうる接近法の一つに過ぎない」とする立場から、いわゆるコンプレックス教科が実施される。ガスパールは1970年代に8年制中学校の校長をしながら実験教育を行った。参照、『教育学レキシコン』（ブダペスト、1977年）及び『コムソモーリスカヤ・プラウダ』紙1988年9月1日付。

《コメント》——訳者

この論文が1987年に書かれたことには意味がある。始めにその事情に少し触れよう。1985年春に政権についたM・ゴルバチョフが新機軸を模索する中、ペレストロイカの標語を多用し出したのは1986年で、1924年以来の歴史をもつ『教員新聞』がペレストロイカの路線にはっきり移り、文教分野の官僚主義を集中的に批判し出したのもこの年であった。そして1987年1月に党中央委員会総会でゴルバチョフが、自国の過去の停滞を振り返って、新しい社会建設のレーニン的原則からの逸脱や、民主的生活基準の違反、思考における主意主義的誤りと教条主義…が高いものについた、と指摘したあたりから、この国の教育史家たちがソビエト期教育史の見直しについて、世論に直接向かっ

て発言し出したのであった。それは訳者の知るかぎり、4月21日付教員新聞の巻頭に掲載されたЭ・ドネプローフの論文「歴史によって自らを検証しつつ」が始まりである。

革命前ロシア期教育史を専門とする彼が、そこで、来し方を科学的に見、全面的に思考し、教育現象の因果関係の総体を見ることができなければ、少なくない困難を避けられないだろう、とする立場から、特に「ソビエト学校・ソビエト教育学の歴史の研究者たち」の怠慢を責め、「慢性になったバラ色のペンキを目からよく洗い落とすこと」や、歴史上の具体的な人物を弾劾する場合にも、状況の単純化をやめること、など噛んで含めるがごとき提起をしたのであった。

このような提起を受けたところに、しかもソビエト期教育史の専門外の教育学者、ボリース・ビム＝バードによるこの論文はある。

アメリカの学者のソ連評価を援用して自国の経験を見詰め直そうとするスタイルはペレストロイカ時代のソ連に一般に盛んである。その手法を取りながらもこの論文は、哲学者・教育学者デューイの1920年代教育に対する、素朴で感動的な高い評価を引用して、1930年代以後の教育体制を批判するアピール効果を高めている点で特に巧みであり、ここにも著者の才気の片鱗が伺える。ここで歴史的批判として取り上げている、学校の画一化、教育機会の不平等是正策の放棄、カリキュラム・教科書の統制、など多くの論点と取り上げる視角には訳者も概ね共感を表明したい。しかし著者の1920年代の教育実態に対する評価には一種の甘さと荒さがあるし、1930年代の体制をもたらした国内外の歴史条件への目配りの不足があると訳者は感じており、ラフな言い方で恐縮であるが、この感想を留保しておきたい。ただし、著者が現在の教育危機とこの根源と見る1930年代体制とに対する反発をバネとして、教育ペレストロイカを推進せんとしている以上、それらの態度の投影としてそのような「甘さ」もやむを得ないところだろうと訳者は考える。

著者はカリキュラム統制、固定教科書制度の開始に比較的スペースを割いて批判しているが、これは近年（ペレストロイカ以前から）ソ連で、カリキュラムと教科書の社会変化への対応の悪さに対する世論の不満、不信がきわめて高まり、この87年当時すでに国内で制度改革が動き出していたため、意識的に、地方の自主性を尊重した1920年代の経験を引いて、自己の主張としたのである。なお、1988年9月から一部の分野の教科書の一教科2種類制と教師による選択権が導入され（教員新聞、10月1日付）、事態は動いていることを付記する。

ビム＝バードが限られた紙数で触れた、限られた論点だが、訳者は、そのすべてに触れることはしない。

ここでは、後段に、このビム＝バード論文がソ連の教育史学界でいかなる反響を呼び起こしたかを示す、これもやはりペレストロイカの、一こまを紹介しておきたい。

実はこの論文の新聞掲載のほぼ1か月後、1987年10月27～28日に、教育史家たちの大きな研究会が開かれたのだが、彼の刺激的な提起はその議論で中心的に取り上げられたのであった。やはりそれは、児童学の「復権」に関わることであった。（なおこの研究会の議事資料の出典は以下、『ソヴェ

ツカヤ・ペダゴギカ（ソビエト教育学）』1988年7号からである。引用に際しては、頁数のみ記す）。

会議の基調報告を行なったソビエト教育史学界の長老、З・ラーフキンは、その冒頭から明らかにビム＝バード論文を意識して、「現れたペレストロイカ『便乗者』とかその幼稚な理解、…歴史主義の原則の野蛮な侵犯に対しては自分の態度を…決定しなければならない」と切り出した。彼は、「教育史学におけるペレストロイカを、過去の出来ごとの肯定的あるいは否定的評価を機械的に裏返しすることに帰着させる…のは心底あやまりであろう。…。例えば、児童学を復権させようとか、その運命を遺伝学とサイバネティックスの…悲劇の運命を帯びた発展と同列におこうとする試みは、疑問である。ここに共通のことと言っても、幾人かのソビエトの有名な科学者たち（Л・ヴィゴーツキー、П・ブローンスキーなど）が、スターリンの個人崇拝の状況下に、遺伝学とサイバネティックスの代表的人物と同じように、乱暴な言い掛かりや迫害を受け、その後は偽りの及び証拠抜きの告発によって、弾圧さえ受けたと言うことだけである。…。こうしたことを幾ら言っても、児童学はえせ科学であると指摘した1936年7月4日のソ連邦共産党中央委員会決定が与えた、児童学の基本『法則』に対する原則的な党的批判から我々を引き離すことは出来ない。」と自らの信念を述べ（103頁）、党中央委員会決定が根拠とした、児童学の誤りの事実を引き、「遺伝学やサイバネティックスと同列に置ける根拠はない」とした。この主題でラーフキンの結びは、「教育人民委員部の系統における児童学的偏向に関する党中央委員会決定が採択されて後、教育者たちの子供研究に対する関心が著しく弱まり、子ども抜きの教育学を承認する傾向が現れたという事実は、理論家と学校実践家の大部分が党の決定を誤って受け止めたということによって説明されなければならない」というものだった（104頁）。これは、丸きり、1956年のいわゆる教育学におけるスターリン批判の段階と同じ論理と内容であった。ソビエト期教育史の大御所の彼に何か時代の変化と歴史学のダイナミズムの反映を期待することは無理だったのかも知れない。

この研究会に出席していた当のビム＝バードの反論は、雑誌掲載資料の限りでは、「科学としての児童学を、新たに、批判的に考察する必要」を指摘するに止まっている（109頁）。だが、やはり出席していたドネプローフは、彼をセコンドするかのように、「現在重要なことは、接近法、道標、公準を入れ替えることであり、旧いステレオ・タイプの結論を利用するのをやめることである。ここから、若干の者には、児童学もえせ科学であると見えよう。歴史家たちは、まだ、児童学そのものにおいて内部闘争がいかに行われたのか、その科学としての成長はいかに行われたのかを知らない。児童学に関する誤った決定の結果、巨大な実験、広大な演習場、探求的な実験室――この当時のソビエト学校はまさにこのようにイメージされている――が打ち壊された」と述べ（111頁）、歴史研究の態度の転換の必要、児童学研究の客観的な状況、36年党決定の批判、および1920年代教育に対するあつい思い入れをひれきしたのであった。

いわゆるグラースノスチ（言論・情報の一定の拡大）の下で、垣間見たように、ソ連教育史学界は動き出している。果たして教育政策決定プロセスの実証的研究まで進むのか、ひいては党の存在

の相対化まで進むのか、――1936年の決定をドネプローフは〝誤った決定〟と言い切ったが――、大変興味深い時代に入ったことは、間違いない。具体的な研究成果が現れ出したとき、日本の私たちの研究のささやかな蓄積は、比較・吟味にたえられるであろうか。

《著者について》――訳者

ボリース・ミハーイロヴィチ・ビム＝バードБим-Бадは、教育科学アカデミー総合教育学研究所の外国教育史研究室（室長K・サリーモワ）の上級研究員である。この論文を執筆した1987年には、連邦科学アカデミー・連邦教育省共設の学者集団『シコーラ（学校）』の教育思潮部長を兼任しており、この肩書きで『教員新聞』『イズヴェスチヤ』紙等に寄稿している。1988年末の現在は、新たな中央教育行政機構＝連邦国民教育国家委員会の諮問機関「臨時調査研究集団『基礎学校』」（事務局長Э・ドネプローフ）で部長の一人として活躍中である。

訳者は1983年秋～84年春、サリーモワ研究室を訪ねた頃、彼と知り合い、二、三度議論したことがある。私は、その中の一つ、ビム＝バードの隣の東欧教育研究室のД・マンスフェーリドも交えて３人で話した時のことだが、彼らが、日本は軍備に金をかけずに教育に回し経済復興もうまくやっている、ハンガリーでは経済でも教育でも面白い実験をやっている、といった解釈を示して、間接的に自国の教育状態への不満を語っていたことを思い出す。こうした、ペレストロイカ以前からのソ連のリベラルに共通のある種の苛立ちが、今回のビム＝バード論文にもはっきり反映している。だが彼は、もっと言葉を費やして直接的に自説を展開したいことであろう。今は、どうであろう。

当時彼は40歳だと言った。英・独・仏・伊語に通じ、専門領域は日本風にいうなら、西欧教育史ということになろう。カントやヘーゲルの教育思想に関する論文から、グラムシの翻訳に至る、種々の業績がある。

近着のものでは、1987年の暮れに出たドネプローフ及びГ・コルネートフと３人で共同編集した教育論アンソロジー『教育の知恵 Мудрость воспитания：親のための本』（ペダゴギカ出版社、286頁。Ｂ５判。初版30万部）があり、また、雑誌『ソビエト教育学』1988年11号に掲載の論文「教育学的人間学の復活の展望について」がある。この11～12月には『教員新聞』で連載コラム「歴史に学ぼう」を担当し、プラトン、カント、イリエンコフ、Ｐ・フレイレ、あるいはスペイン内戦期の例など多彩に引きつつ、教育のペレストロイカを鼓舞している。